

● クライストチャーチの震災復興について

団員 今村 邦男

ニュージーランドは、南北二つの島からなっており、南島の最大の都市が人口約37万人のクライストチャーチ市である。その地方を、昨年2月22日12時51分、M6.3の直下型大地震が襲った。死者185人の内日本人の語学留学生28人の犠牲者が含まれており、その留学生の多くが犠牲になったCTVビルや、市のシンボリック存在であり131年前に建設されたネオゴシック調の大聖堂の崩壊した姿の映像は、その後1か月も経たないうちに発生した東日本大震災のそれとは別に我々の記憶に新しい。



(エイボン川のほとり)

クライストチャーチ市は、「ガーデンシティ」が売りで、イングランド以外で最もイングランドらしい街と言われて

いるほど、市内を流れるエイボン川の両側に広がる740もある整備された公園に咲く花々、また個人の家々のガーデニングは素晴らしく、我々訪問時には椿や桜が終わりかけていたもののフジやシャクナゲまたバラ等の花が満開で美しかった。

私たち視察団は、ニュージーランド到着の翌日、午前中にクライストチャーチ市を訪問し自治制度・地方分権と共に震災復興のレクチャーを受け、午後は先の震災で事務所が使用できなくなり、新しく空港ビル内に移転したというクライストチャーチ・カンタベリー地区観光局の最高責任者ティム・ハンター氏の説明を受ける事ができた。

氏によれば、

○ニュージーランドは、「地震がない国」であったために、耐震構造に重きを置いておらずビルの崩壊などが地震規模以上であった。また、液状化現象で5万棟が被害を受け現在も崩壊の恐れがあるビルが市の中心部に4,200棟は、残っている。

○震災が市の中心街に集中したため、そこでの営業が出来なくなった業種で働く労働者約5万人が失業し、その内ホテル等の観光に関する業種の労働者1万5,000人が含まれている。

○外国からの観光客は隣国のオーストラリアからが65%を占めており数年前からは中国が増えその他日本や世界各国から多く訪れており、震災の際クライスチャーチ市には観光客6,000～8,000人が滞在していた。

などの他、国民の誰もが経験をした事のない惨事の数々を語り、観光局として辛かったのは、震災後3カ月間は、「クライスチャーチには来ないでほしい。」と、世界に発信することであったが、現在は観光スポットの85%は回復しているとの事であるものの、海外からの観光客は50%、国内客は20%減の状況になっている、との事であった。

市の中心部が（松山で例えると、一番町と二番町がすべて）バリケードで封鎖され車も人も立ち入り禁止区域のレッドゾーンになっており、その周囲を見て回る観光ツアーも増えているらしい。

我々視察団も、その説明の翌日、予定外の時間をつくりレッドゾーンを見学する事としたが、その内部は正にゴーストタウンで全体の70%の建物を取り壊す予定とのことであるが、一部建物が取り壊



（フェンスにより立入りが規制されている市中心部）

され更地になっているものの完了までには相当年数を要すると思われた。全ての建物の入り口には赤・黄・緑に分けスプレーで「CLEAR 24/2 TF

3 USAR」等と書かれていたが、援助隊がビル内の生存者がいないのを確認し、確認した日と援助隊の国籍と所属が書かれており、赤は立ち入り禁止、黄は危険だが出入りはできる、緑は立ち入りできるとの意味らしい。我々が見える範囲で確認する限りビル取り壊し用の大型クレーンは



(フェンス越しにかつて大聖堂があった方向を望む)

2基しかなく、その状況をガイドは、「クレーンがないんですもん。」と説明したが、確かにその作業状況を見る限りでは完全復旧までには長期かかるものと実感した。本来ならばビルの谷間から見ることで市のシンボルである大聖堂が見える位置まで行ったが、残念ながら崩壊していて見る事が出来なかった。付近のバリケードの金網に「大聖堂を壊すな。」等と書かれたビラが多く見られたが、崩壊がひどく又膨大な費用がかかる事から再建しないとの事であった。

一方、中心部にあった企業は郊外に移転し新しい企業団地的なエリアが出来つつあり、そこには震災前300あったバーの内30店舗程がコンテナを活用して営業を始め結構繁盛しているとの事であった。そのエリアの発展の様子は、



(カンタベリー地区観光局での質疑応答)

ドルフィンウォッチングのボートが発着するアカロア港に行く途中に広がっており、人口密度の低い広大な土地を有する国のなせる技だと思われた。

震災後、市当局からは多くの復興計画が出されたものの、中心部の壊滅のため大きく進行していなかったが、この度具体的に・大型ホテルや大規模なイベ

ント会場の建設・世界からの飛行機便の誘致・国際規模のスポーツの開催をすすめる事、更には市が70%の資本投入をして町中を流れるエイボン川を利用した「セントラルシティー ブループリント」の都市計画が出され大きく前進したとの事で、その進捗状況に注目したい。

観光局のティム・ハンター氏の、「今後の市の復興は、震災直後から『励まし合い』でスタートしており、今もそれは続いているから大丈夫です。今も花は同じ所に咲いていますから。」という言葉が印象的で、一日も早い復興を祈らずにはられない。